
言っておくが、この被害者は俺

黄龍と龍導

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

言っておくが、この被害者は俺

【Nコード】

N2215K

【作者名】

黄龍と龍導

【あらすじ】

これを話すにあたり一つ注意をしておこう……俺は被害者だ。あいつに会った時、こんなにも長い付き合いになるとは米粒一粒も思っていなかった。そう、あれはこの町に引っ越して来た時である。更新速度は遅いので温かい目で見てください。

俺は魔法使い（前書き）

はじめまして、龍導です。よろしくお願いします。

俺は魔法使い

こんな面倒な事になったのはあの女のせいである。

先に言っておくが、俺は被害者だ。あの女が居なければ、俺は自由気儘な生活をしていた訳で、その計画を破綻させたのが件の女である。

つーか他人に責任を押し付けるなどかの意見は受け付けない。全ての始まりの種がソイツな訳で、俺だって本当は他人のせいにはしたくない。

理由の一つとしては、その女が俺を卷込んだにも関わらず、悪気一つ感じていない事だ。

全てが終わってから一言『有り難う』と言われた物の、それからは週3のペースで俺の所に来るんで、このままではいずれ、ソイツに愛着を持ってしまう。

ん?……さて、俺は今何を言った。うわあああ……

……

……

……

だってさあ、俺だって男だしね。可愛い女の子が家に来る度に食事を作ってくれるんだよ。考えない奴は居ないとおもうぞ。

アレ? また話が脱線してしまった。つーか何を俺は言っただよ。アイツは加害者。アイツは加害者。アイツは加害者。アイツは……

事の発端としたら、俺が散策していた時に起きた事件である。まあ、事件よりは被害？

なぜ散策してたかとは、そこにはちゃんと理由がある。俺はその日に引越して来たからで、付近に何があるか知るための散策であった。

真夏の日差しは厳しいものです。只でさえ暑いのに、引越し作業は辛い物だ。業者の人が全て搬入をしたが、段ボールから物を出すという一連の作業、すごくかったるい。

それを途中に投げだし、空腹を補う為にも部屋から抜け出した。猛暑の中かなり迷ったが、空腹には勝てなかった。

外へ出ると意外や意外、涼しげな風が吹き、至って問題はないではないか。神様に感謝である。まあ余り信じてはいないが……

話は変わるけど、事の話をする前に必要な事だから、俺はまず問う。神様ってなんだ？

いやあ、真面目な話だ。人間誰だって神様に一度は願ったりするだろ、その時は神様って存在をどのように定義できるかな。有名な神といえば神話に登場する最高神ゼウスだろうか。全知全能という完璧な者、この世界の創造主の代表的な神様。しかし疑問を感じた事はないだろうか？

なぜ神は不完全な世界を作ったのだろうか？

なぜ闇がある？

なぜ負がある？

なぜ苦がある？

全知全能であれば、この世とは思えない完璧なエデンを造れた筈である。そもそも神様という存在を認めてしまうと、我々という生物は神にとっては家畜だ。バランスを計るように、1日に千人が生まれて千人が死を迎える。しかしながら、こんなバランスの取れてないこの世界がある時点で神の存在を願うのは無謀であり、俺はこの世界には元々神なんて居ないと思っている。居る前提で考えてみてどうだろうか？全知全能な者がこの世に現われてみる、普通に恐

怖を抱くだろよ。異質だろ……うん。

実は今回の話はこんなファンタジーな話になってしまふのだ。

本題とすれば俺は魔法使いである。

え？意味不明？

いや……真面目にさあ、俺は俗にいう魔法使いな訳。

神という存在について否定的に話したが、俺という存在もまた異質になってしまうが、それはダメ出ししないでもらいたい。魔法使いを説明するにあたり、長々と説明するのも面倒だが、仕方がない。多分、映画とか漫画やテレビとかの魔法使いが想像されると思う。しかしながら事実とは異なってしまう。そこまで万能じゃない。そもそも魔法もとい魔術を使うにあたって、生命力を削る行為であり、その生命力を数多くの術式に乗せて発動させるものだ。仕組みさえ知らなければ、俺だって普通の人間だったんだ。

話としたら、あるカッコイイ魔法使いが困っていた一人の可憐な女性を助けてあげた話だ。

……………語弊であった。

そう、あれは7月21日のお昼時に起こった話だ。

……
今の引越し業者は凄いな。たった3人で、あの量を運ぶのだから

部屋を選ぶ時に何を基準にするだろうか。家賃だろうか？まあ俺には関係ないか。買ったんだからな。今日から此所が俺の住家であり活動の拠点になるのだ。

我が城は徒歩五分圏内に駅があり、目の前の市の中央公園を挟ん

で右奥に商店街で、左側に大手食品店があつて、住宅に囲まれたデザイナーズマンションである。

エレベーターで4階に上がり、まず驚いた。見たところ玄関が3つしかない事だ。部屋を訪れてその凄みを知った。部屋一つひとつが異様に広い。5LDKとでも言っておこう。言葉では表せないもので、後から来た家具がとてつもなく小さく感じる。

金額はアレだったものの、とても良い物件であつた。

そもそも20歳の男が、またまた此所に一人暮らしとは大層な間違いだ。うんやはり

それこそ引越し業者が、コイツ何者？という奇異な目で見て来たこともある。

段ボールから物を出すという単調な作業の中、俺という人物を証明する物を取り出した。それは魔術書である。注意しとくが、決して読めば魔法が使えるという代物ではない。見た目は分厚い哲学書である。内容も人間の心理から世の理まで様々であり、素人や普通の人間から見たらこの本は、古びた只の哲学書なのだ。

何故それが魔法書と言われるか、そもそも魔法を説明しなければならぬ。映画から漫画など、魔法少年少女が魔法を格好がよく使っているが、魔法は決してその様な軽々しい物ではないのだ。言うならば『魂の軌跡』である。

魔法とは己の魂の片鱗であり、魔法を使うにあたり、自らの魂を糧に想像した現象を生じさせる為なのだ。魂を削るという異形の通り、テレビゲームのように一夜すればマジックポイントが回復する、という簡単な事ではない。

話を戻すが、只の哲学書がなぜ魔法と繋がるか話そう。いや、魔法と哲学の繋がりを話そう。魂を削る行為の為には己への心理を追求し、魔法という奇跡を起こす為の理解が必要なのだ。簡略化すると、魔法を使うには己との対話が必要という訳だ。

対話、会話、言葉は魔術には欠かせないものだ。言葉は魔術である。言葉ひとつで変わる事があり、言葉ひとつでも変わらない事が

ある。言葉はそもそも魔法だ。言葉により己を強くし、言葉により相手に畏怖の念を与え、言葉により己の勝機を見出す。言葉は大切なものなのだ。

この魔法書もとい哲学書は、俺の恩師からの最初で最後のプレゼントで、俺への恩師からの魂の軌跡である。

一息、思い出していた恩師との記憶……溜息を吐き、止めていた作業をやり始める。

それにしても面倒くさい。

本当に面倒で

本当にくさい。

あれ？これじゃ臭いの話になってしまふよ。

ふと時計を見る。

時計は13…21

そういえばご飯を食べてない。それも朝からである。朝から引越し作業で忙しくて、食事の時間がなかった。空腹と言えば空腹だった。

天屋物を頼もうと思ったが、番号すらわからない。さてどうするよ俺……

窓の向こうは見るからに暑そうだ。このクーラーにより作られた結界内からは出たくないものだ。

しかしながら、

一度考えてしまうと隠せないのだ。空腹が警告のベルを鳴らす。

俺は負けずに作業をさっさと終らせ、ゆったりとその後のスロウライフを過ごそうと決意した。だが、昼食休憩という文字が頭から離れない。

そして俺は、

そう俺の決意は……

弱
か
っ
た。
。

魔法使いとフロックコート（前書き）

白いホームズ

魔法使いとフロックコート

スーパーの店内音楽って、すごくテンション高いよな。

休日という事もあり、多くのお客で賑わう大手食品店。元氣よく鳴り響く店内放送がなんかイイ感じである。

空腹に負けた俺は今買い物籠を持って、主婦に混ざりながら野菜コーナーに居る。適当にファミレスとかに入っても良かったのだが、マンションに綺麗なシステムキッチンが在った為、料理してみるのも良いかなと思った次第であった。空腹だが、これからあのデザインナーズマンションに住む事により機嫌がいいのだ。普段しない料理もしてしまう。

洗剤などを買う為に日用品コーナーに差し掛かった時、機嫌が良かったせいか、俺は普通人から善人へとクラスチェンジした。

何故かという、目の前で万引きをしようとする女の子が居たんだ。普通は何もしないとは思うけど、今から罪を犯そうという人間をほっとけなかったのだ。

日用品から隣接した薬品コーナーに女の子は居た。雰囲気からして高校生ぐらいか、とても綺麗な顔立ちで、白いフレームの眼鏡を掛けて髪はよく手入れされており肩までの長さ、服装は白っぽく統

一されておりお洒落であるが、何故か……謎すぎるカ所がひとつあった。

考えてほしい。今現在夏真っ盛りである。太陽の日差しが強く、この町にも多少はヒートアイランド現象なるものが訪れ、町並が緑化されているので少し改善されている。だが確実に暑いのは確かである。

だが、

だが彼女は、

白いフロックコートを着ていた。

暑いだろ！！確実に暑いだろ！！こんな夏場に白いホームズスタイルの女の子が居る！！探偵ホームズも夏ぐらいはコートは脱ぐぞ！！そして暑いと同等に怪しすぎるだろ！！確実に失敗してるよな！！お願いだから早く着替えて来なさい！！見てるこっちが恥かしいよ！！なんで此所まで無事に来れたのかが不思議だぞ！！つか誰が見てもその格好でスーパー入ったら万引犯って考えるぞ！！いやっ！！どちらかとしたら露出教か！？

脳内で俺は最後に女の子に失礼な激しい怒声を放っていた時、相手に動きがあった。

……目が合った。

うん。目が合った。

彼女は俺を驚いた目で見ている。あまりの驚きに持っていた品物を落とし、石のように固まっている。そして涙目になっていく。

大丈夫だよ。今の俺は君を犯罪者にしない。たとえ女露出教だとしても、有り余る寛大さとオカン級の優しさで助けてあげるんだ。俺は自らが出来る最大の笑顔で応える。

が、更に怯える女の子。

罪悪感が半端ない。なんか俺が苛めてるみたいだ。とりあえず近付く

意外と背は高かった。俺の目線ぐらいで、165位だろうか、やはり白いフロックコートで、更にブーツを履いている。とてもコー

トの中身が気になる。うん。

「えっと、大丈夫だよ。俺は何も言わないし」

その言葉に動揺したか、涙ぐんだ顔で見つめてくる。彼女もどうしたらいいか分からず、手を出したり引っ込めたりしている。

「じゃあ……お会計してくるから、外で待っててね。」

彼女の足元に転がった商品を、おもむろに買い物籠に放り込む。

まだ彼女は口をパクパクしながらも戸惑いが見える。

レジへ向かおうとした時、我慢できず、彼女に言った。

「暑いだろ普通……」

会計を済まして外に出ると、バス停の近くに備え付けてあるベンチに不審者がいた。ベンチの上で体育座りのフロックコートの女の子。不審者極まりない。ベンチの上で両足を抱えてキョロキョロと何かを探していた。

あっ……俺は見つけられた。

「ごめんね。待っててくれたんだ!! ありがとうね。」

先程よりは落ち着いた様子の子。目をパチくりしながらも俺を見る。

レジ袋から品物を取り出し、女の子に投げやる。慌てて物体を取る女の子を尻目に隣りに座る。物体がソレだとわかった女の子は、また目をパチくりしながら俺を見る。

さて、どうする。買った商品を渡すという任務は達成した。だが、この後どうしたらいい？素直に動機を聞くか？詮索しないで帰ろうか？

「あつ、あのっ……」

女の子から話し掛けて来た。一生懸命に次の言葉を探している女の子。ここは優しく接する。

「どうかしました？」

「……なんで……えっとお、してくれたんです……か？」

迷いに迷い疑問系だ。彼女の声はとても綺麗だった。声優に居そうな声である。『滝沢くん!!』と一度呼んで欲しい。

「んと、何となく」

俺はその一言しか答えを持っていなかった。本当に気紛れであった。ただ単に気分が良く、あの場に彼女が居ただけ、理由は深くなかった。その俺の答えに、彼女は反応に困っているように見える。そりゃそうだ。万引犯を見たら普通は無視するか、店員に注意するだろうが、その人を形はどうあれ、助けるなんておかしいのである。

「……………」

なんか考えてる様子だ。……これ以上彼女を困らせたくないし、こちららも悩みたくなく、立ち去ろうと思いレジ袋を手元に引き寄せた時であった。

「あつ、待って!!」

止められた。

フロックコートから僅かに出ている白い手は、レジ袋を持つ右腕の服を引いている。

「……………」

待つ事にした。女の子は自らが起こした行動に頬を赤くしている。単にその様子が面白い。また彼女は言葉を探している。

「えつとお……」

言葉を待つ中、雲に半分隠れた太陽を見据える。そういえば暑くないのを感じた。

曲がりにも夏の昼頃だ。スーパーに来る前の涼しげな風は今は無い。今座っているバス停には日陰もなく、直射日光が降注ぐ。とても快適な温度である。暑くもなければ寒くもないという。

そんな事に煩惱を費やした俺へ彼女が声をかける。

「あつ、あの!! お願いがありますうん!!」

最後に鈍ってないか?

まあそれにしてもお願いか、なんだろう? 彼女は続けて言葉にする。

「とっ、友達になってくだしい!!」

うわあ、『しゃい』とか可愛いな。

……

……

……えっ、友達？

「いっ、いいけど!!」

友達って申請するもんなの？つーかこの流れはなんだ？勢いあまって承諾してしまった。どうしよう。

しかし、この町に来て初めての友達が、夏なのに白い探偵さんルックの変な女の子とは、大変な事件である。

「あっ、あっ!!あっ!!」

どうしたんだ!？彼女は目を見開き、口をあわあわと震わせている。

心配になり声をかけようとした所で、

「あっ!!ありがとう!!」

感謝された。

蟻が十匹という文字を使って感謝された。一旦思考が停止した。こんな流れで感謝された。変だろコレ、俺は彼女についていつてらるだろうか？ってかペースが狂う。今更だが、少し後悔した。

「なっ、なんで友達に？」

混乱する思考から言葉を絞り出すが、

「……ん。何となく」

なんか負けた気がする。とても悔しい。大人気ないがここは反抗する。

「お互いに『何となく』と話を進めてしまうと話の内容が尽きてしまう。それじゃ駄目だから、君を助けたのかどうか知らないけど、その行動をした理由を述べよう。俺は君を見つける前に嬉しい事があったんだ。それで気分的に『町の人に良い行いをしたい』という気持ちがあった。その時に君が現われた。たまたま君が居た。それだけなんだ。だから、たとえ君じゃなくとも同じように話し掛けて、同じように行動すると思うよ。」

屁理屈を並べて言ってやる。これでまた彼女は困り果てるだろう。いい加減、空腹が限界である。

「はあ……、それで友達になってくれるんですね？」

「！！この方話をお聞きになってない！！ しかも真顔である。なんて子だろうか。全くも微動打にしない。普通は機嫌を損ねるだろうが、しかし彼女は引き下がらなかった。いや、その素振りもない。」

「友達になってくだしゃい。」

真剣に言われたけど確実に失敗だよ。本日2回目頂きました。もしかして自分の事言ってる？『シャイ』とかって、でもまあ友達か。彼女は『むう……』と唸りながら俺の返答を待っている。正直可

愛かった。ご飯をお預けくらっている犬のようにかわいらしい。
断る理由は無い。口実としてはあるが、それは彼女と無関係だ。

「わかった。これから友達だ。」

見るからに嬉しそうだ。俺の妄想の中で彼女は千切れんばかりに
尻尾を振っている。

「私、桜美咲サクラミサキと言います！！大学生1年目でし！！よろしくです
！！」

何故か切羽詰まる言い方であった。それにしても桜美咲か……綺麗
な名である。更には大学生とは、てっきり高校生だと、ん？名前
が超似てる！！やっぱ『滝沢くん！！』と呼ばれたい。まあ滝沢
じゃないのだが、

「ああ、よろしく。俺は空クウだ。空・イグジスタンスという名だ。
俺も大学生だ。」

「いぐでいす？」

「イグジスタンスだ。俺さクォーターなんだ。俺の祖父さんがど
こぞの外人だったらしくてな、でもまあ日本人だけだね。皆から
はクウよりはソラって呼ばれてるからそうしてくれれば有り難い。」

実は祖父があゝの恩師である。あの日あの時、爺さんが俺に道をく
れたんだ。自らの軌跡を俺に与えて、今も俺の心という記憶の中で
軌跡を紡いでいる。

「では、クーうさん。私のことも美咲とお呼びください。」

「あれ？俺のモノログどうしてくれんでんだ！！それと、それじゃ某飲料水のマスコットキャラクターになってしまっじゃないか！！」

「可愛いじゃないですか？クーさん。いや、プーさん。」

「進化した！？今度は蜂蜜大好きなクマさんへ！？しかも『さん付けにする事で確定してらっしゃる！？』つかこの話の流れはおかしいだろうが！！」

中々この桜美咲の性格が掴めない。嗚呼、とても面倒になって来た。

「じゃあ……、ソラさん。」

「やっとそれに落ち着いたけど、間があったぞ！？」

なんだこれ、天然とかではない。クールなどでもない。なんだろうこの人のキャラ

逆に俺がツツコミとして定着しつつある。そんな時、忘れていた事が現象として起こった。空腹を感じた俺の内臓は、摂食中枢が自律神経に働きかけ、胃の蠕動運動を引き起こし、胃の中の空気や胃液が移動させられることで、例にならって「グギョルル」と音が鳴る。

は、恥ずかしい！！数回ツツコミをかまして油断してしまった。彼女はきょとんとして俺を見ている。嗚呼、この流れだと貶される。今度はツツコミを叩き込む力も無い。

「……あれ？私かなあ？……すいません、お腹減っちゃって！！」

いやああっ！！！！こいつ天然だ！！！！優しい天然だ！！

「そうだな。俺も空腹だ。」

そして俺は悪い子だあ！！罪悪感極まりない！！

「空さん。ところで、そんなに沢山の食材を買って……料理でもするんですか？」

俺の脇に置かれた2つの袋を指し、彼女は窺う。

「実は、今日この近くに引っ越して来たんだ。それで昼食の食材を買いに、多いのは冷蔵庫がガラガラだと困るから」

へえ、とぼやくと、彼女はまた無口な状態に戻った。違うな、言葉探しの旅へ旅立った。そんな彼女に俺は有り余る罪悪感から一つの提案をした。

「なあ、せっかく友達になったんだ。一緒にご飯でもどうだ？俺が奢るし、近くのアミレスにでも行こうよ」

また空腹音が鳴るのを恐れ、空腹に我慢できなかったのが本音だが、『奢る』の言葉に体をピクンと動かし、今度は彼女から真正銘の空腹音が鳴った。

「……よ、よろしくお願いします。」

そんなこんなで俺はレジ袋を2つぶら下げ、横にフロックコートの彼女を連れて、バス停のベンチを後にした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2215k/>

言っておくが、この被害者は俺

2010年10月28日08時51分発行